

読書日記

山口 正介 ④

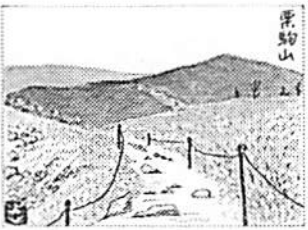
だいぶ前になるのだが、映画監督の伊丹十三さんから数冊の本をいただいたことがある。そのなかにこの『魂の殺人』―親は子どもに何をしたら―(アリス・ミラー著・新曜社)があった。

すでに定評のある精神分析の本だ。ぼくはある種の事情によって子供のころから精神分析や心理学の本をよく読んでいたのだが、読めば読むほど解決から遠ざかってしまうようなものが多かった。悩みが悩みと意識されるが、それが解消することがないというような書き方のものがほとんどだ。場合によると症状がさらに悪化するのではないかとと思われるものもあった。

しかし、結論からいえば、この本を一読、ぼくの心から霧が晴れた。少なくとも解答への糸口というか第一歩を提示してくれた。ひどいよって

は本書を読んでその道の遠さに頭が痛くなった、という場合もあるらしいが、ぼくは救われる思いだった。

この本の内容を簡単に書くと、「親にぶたれた子供は自分の子供をぶつ」「親にひどい目にあつた子供は他人をひどい目にあわす」「親はそれを子供に良かれと思つてやるからこわい」というものだ。



ここから何故、戦争が起り、人は人を殺せるのか、とか、最近多発する少年犯罪の原因がわかってくる。原因が分かれば結果を変えることもできる、というあたりが西歐的な合理主義とも思えるが、今だからこそ読んでもらいたい本だ。

まず親を許すことから始めよう。最初にひどい目にあつたのは彼らなのだから。